

# 人生を変えた新復員兵援護法

——『高等教育クロニクル』の記事より——

宮 田 実 (訳)

## “A Life Transformed by the GI Bill”

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

### 海兵隊員から大学生へ

水曜日の早朝、ロン・シュライバーがダイニングテーブルに座って、手書きのノートを熟読している。窓から漏れている光は寒い外の暗闇を照らしている。2頭の老犬が玄関ドアの近くで眠っている。

マクダニエル大学4年生のロンは学期末のこの日、数時間後に運動生理学のテストを控えていた。テストの日はいつもそうなのだが、彼は3時半に起き子供たちが起きる前にテスト勉強をしていた。アイパッドから流れてくる講義に集中していた。

29歳になるロンはメリーランド州北部のウェストミンスターという町で育った。彼は子供の頃からマクダニエル大学の堂々としたレンガ造りの校舎周辺をよく歩いていた。その時に思ったことは、町を見下ろすあの丘の上ではどんなことが起きているんだろう。あんな立派な大学に通うってどんな感じだろう。そもそも大学に行くってどんな感じだろうということであった。

ロンの家族で大学に行ったものはいなかった。ロン自身も大学へは行けないと思っていた。4人兄弟の長男のロンは17歳の時、家を出た。レンガ職人の頑固な父親との衝突に嫌気がさしたロンは地元のスーパーで夜間働きながら高校を卒業したのである。高校3年生

---

平成24年7月5日 原稿受理  
大阪産業大学 教養部

の時、彼は高校卒業後に入隊するという条件で米国海兵隊に志願した。そして、2001年8月、彼は海兵隊の初年兵のための基礎訓練に参加した。

海兵隊で彼は出世して機密事項取扱資格を得、軍警察官というエリートポストを得た。太平洋司令部の司令官の護衛を担当したこともある。彼は同僚の海兵隊員と結婚し、2人の子供に恵まれた。

ロンは海兵隊で生涯の仕事に出会ったと思った。彼は昇進し続け7年間という短期間で2等軍曹になった。ヴァージニア州とハワイ州に駐留した時、家を2軒購入し、改装した。その間、ロンは通信講座で10の一般教育コースを修了した。彼の目標は準学士の学位を取得することであった。

その頃アメリカ議会が新しいG I法（復員兵援護法）の導入を検討しているという情報が入ってきた。この新法は復員兵が無料で大学教育を受けることができ、生活費も給付されるという内容であった。ロンの妻のジェニファーはカリフォルニア州の高校を卒業後すぐに海兵隊に入隊したのであった。2人はこの新法に注目した。

2008年6月に新復員兵援護法（the Post-9/11 GI Bill）が成立した。ロンとジェニファーは決心した。大学へ行こうと。彼らは旧のG I法ではなんとか準学士号を取れると思っていた。新法の内容を知ったロンは「2人とも大学で勉強ができるんです。子供たちがいても大丈夫なんです。生活費の心配もないのです」と言った。突然、不可能だと思っていた道が開けたのである。

2012年5月19日にロンはマクダニエル大学を卒業した。ロンは新復員兵援護法で大学に入学した約55万人のうち1人である。海兵隊には戻るまいと思っていたロンにとって海兵隊からの再入隊の案内は悩ましいものだった。8年間も海兵隊にいた者であればずっとそこに留まるのが一般的である。しかも、海兵隊は彼が再入隊すれば9万ドルのボーナスを支給すると言ってきたのである。

しかし、ロンは再入隊の誘いに応じなかった。彼は海兵隊時代、あまり家に帰れない生活をしてきた。たまに家に帰ると子供たちに忘れられて良い親子関係を築けなかったのである。このことの反省から彼は子供たちとの時間を優先したのである。

## ロンの大学生生活

朝日が昇り始めるとロンは台所へ向かう。今は妻のジェニファーが単身アラスカ州で勉学中のため子育てと家事はロンの担当である。彼は手際よくピーナッツバターサンドイッチを作り、リングの皮をむく。子供たちの弁当の準備ができると、6歳の娘ローリーと5才の息子マイルズを起こしに行く。歯磨きの後、着替えさせ、シリアルとワッフルを準備

する。食事が終わると3人はリュックを持って家を出る。午前6時45分である。子供たちは車に乗り込む。車が曲がりくねった道路を走る間、アイパッドから講義が流れている。マイルズとローリーは後部座席でふざけ合い、大声で騒いでいる。

ほどなく陽気でそばかす顔のローリーを預ける託児所があるメソジスト教会に到着する（ローリーの学校は現在休暇中である）。ロンは受付をすませ、ローリーとハグをして、車に戻る。次の目的地はマイルズの学校である。15分早く着いて、ロンはロビーのロッキングチェアに座り、マイルズはバッグチェアに倒れこむ。ロンは 아이폰を取り出し講義ノートを復習する。マイルズはおとなしく父親の勉強の邪魔をしないようになっている。ロンは待つことに慣れているようだ。彼は「海兵隊時代の習慣でいつも10分か15分前には集合するんです」と言う。

ロンは午前7時45分にマクダニエル大学に着く。車を止めてキャンパスの中心に向かって芝生の丘を駆け上がる。運動生理学の授業は通常8時に始まるが、テストの日は少し早く始まる。教授はロンの育児の状況を把握しており少し遅れて来ることを知っている。ロンは教室の4列目の座席に座りテストに取り掛かる。

ロンは2人の子供の親であり、大学生であり、また、アスリートでもある。彼はマクダニエル大学のクロスカントリー部と陸上部に所属している。彼にとって1分1秒がとても大切なのである。前日の夜、子供たちの水泳教室が終わるとシャワーを浴びさせ、その場でパジャマに着替えさせた。家に帰るとすぐに子供たちを寝かせるためである。彼は少しのフリータイムも無駄にしない。大学の課題の提出期限を延ばしてもらおうなんて思わない。彼は常に前に進むことを考えている。

この1年間は彼の強い意志が試されている。妻のジェニファーは現在、アラスカ州の大学院で資源経済学の修士号を目指している。彼女は2年間でマクダニエル大学の学士号を最優秀の成績で取得した。現在最終年度の奨学金を受けている。そういう事情でロンは現在シングルペアレントなのである。

生活を少しでも楽にするために、彼らは今春、隣町の借家から大学に近いロンの実家に引っ越した。ロンが卒業すればすぐに家族全員でアラスカに住む予定である。

## マクダニエル大学との縁

テストが終わるとロンは「パブ」という名のカフェに向かう。バターとシロップがたっぷりのったフレンチトーストを食べながら、ロンは「あのテストでエネルギーを消耗しましたからね」と言う。運動生理学専攻のロンは今年の研究テーマ「素足でのランニング」について熱っぽく語る。カフェの近くに復員兵学生によく知られている小さなオフィスが

ある。そこにはロンが「人生で妻の次に重要な女性」と呼ぶローズ・ブリザードがいる。ローズはマクダニエル大学復員兵課の認証官で、少し南部なまりのある心優しい女性である。彼女のデスクには小さなアメリカ国旗と生後4か月でバレットという名のグレートデーン犬の写真がある。

1600人の学部生を擁する私立のマクダニエル大学は2002年に校名をウェスタンメリーランド大学から現在の校名に変更した。同大学では新復員兵援護法発効後復員兵学生が増えている。同法が発効した2009年、即ち、ロン夫妻がマクダニエル大学に入学した年まで、復員兵学生数は13～18人で推移した。しかし、2011年までにはその数は約3倍になった。そのほとんどは新復員兵援護法の恩恵を受けていた。全国では55万人以上の復員兵がこの法律のおかげで大学進学を果たしている。

ロンは大学進学という重大決心をした時のいきさつをよく覚えている。それは新復員兵援護法が発効する数か月前、2009年の春だった。ロン夫妻はハワイ州からロンの家族や親せきが住むメリーランド州へ引っ越すのが最善の道だと考えた。ロン夫妻はメリーランド州の3大学に志願した。その結果、ロンが進学を夢見ていたマクダニエル大学が入学を許可したのである。しかし、マクダニエル大学は私立大学であり、年間17000ドルの差額を支払わねばならなかった。この額はロン夫妻が払える金額ではなかった。米政府は学費の差額を援助する「黄色いリボン」プログラムを実施した。マクダニエル大学はこのプログラムへの参加を決めたのでロン夫妻は同大学で学ぶことができたのである。ロンは「驚きました。タダで大学に通えるんだとわかって。こんなにラッキーなことはありません」と言う。

彼らは家を借り2人とも勉学に没頭した。ロンは運動生理学を専攻し副専攻としてコーチングを選んだ。そして、クロスカントリー部と陸上部に入った。ジェニファーは政治学と経済学を専攻した。2人ともアラビア語を学んだ。また、中米のベリーズへのフィールドトリップにも参加し単位を取得した。

ロンはマクダニエル大学での生活を振り返って次のように述べる。「私はこの大学が大好きです。この大学が僕たちに与えてくれたものはあまりにも多くて言葉では言い表せません。」

しかし、すべてが順調だったわけではない。初めの頃はいろいろな問題が発生した。住宅手当や書籍代は給付が遅れることがよくあった。ローリーとマイルズは保育園を嫌い、両親が一体何をしているのか理解できなかった。ロン夫妻は子供たちに「大学で勉強することが仕事なんだよ」とよく言った。最悪だったのは、ロンが海兵隊を辞めたことが間違っていたのではないかと不安に思ったことである。

## アスリートの夢

夕方、遠くに雨雲が見える。しかし、マクダニエル大学のグラウンドには陽光が降り注いでいる。そこでは十数人のランナーが練習の開始を待っている。ロンは子供たちを迎えに行き、戻ってきたところである。ロンの母親とスクールバスの運転手がもうすぐやって来て子供たちを帰宅させる。息子のマイルズはトラックを走り、陽気な陸上部監督のダグ・レナーにあいさつする。その後、マイルズは陸上部員たちに腕の力こぶを見せる。ロンがウォームアップの走りを始めると娘のローリーがその後ろを走る。カーブにさしかかるとマイルズも小走りに追いかける。そしてその日の練習が始まる。800メートル走の繰り返しである。ロンは陸上部のリーダー的存在である。

今から約3年前、ロンがマクダニエル大学に入学する前にロンは同大学のクロスカントリー部の監督もしていたダグ・レナーにメールを送った。ロンはそのメールで「家事や育児で忙しいけれど走りたいんです。あなたのために一生懸命がんばります」と書いた。すぐに監督から歓迎する旨の返信が届いた。レナー監督は次のように述べる。「元海兵隊員のロンは今やもう一人の監督のような存在です。私がチームのメンバーに話してもあまり聞いてくれませんが、ロンの言うことはよく聞くんです。」ロンは卒業式で大学から陸上競技の最優秀選手賞を受賞することになった。

ロンにとって海兵隊時代のウルトラマラソンの経験がとても重要なものになっている。陸上部の存在がロンの大学進学の一因となった。ロンはできる限り陸上部の練習に参加する。また、彼は陸上部の部員たちを海兵隊時代の仲間のように思う。

ロンにとって大学で陸上競技をするということは十代半ばからの夢だった。彼は「海兵隊に入った時にその夢をあきらめました。大学に行けるなんて思ってもいませんでしたから」と言う。

## アラスカへ

ステーキサンドイッチとポテトチップスのディナーの後、ローリーはアイパッドで両親が2010年に行ったアラスカ旅行のビデオを見ている。冠雪のマッキンリーをバックに映った笑顔の母親を見て歓声を上げる。壮大な山々の景色はまもなく日常の風景になる。ロンと子供たちは6月中旬にジェニファーの住むアラスカに引っ越すことになっている。ジェニファーはアラスカ州のジュノー市にあるアラスカ州商業漁業参入委員会に研究員としての就職が決まっている。彼女は働きながら修士の学位を取得しようと考えている。

ロンの今後の予定はまだ決まっていない。彼は優秀な成績で学部賞を受賞して卒業した。彼を指導した教授たちは彼のリーダーシップと熱意を絶賛した。彼は陸上のコーチングや

アメリカ農務省林野部での仕事に関心がある。妻が修士号を取得したら海兵隊に将校として戻ることも考えている。

ロンは今は父親であることを楽しんでいる。数年前子供たちが彼に反抗した頃のことを彼の心に今でも重くのしかかっている。大学で勉強していた時、勉強が忙しすぎた時、つらい時期があった。子供たちとの時間をもっと持たなければいけないとよく思ったものだ。また、子供たちが必要としているものを十分に与えているかと自問した。彼はマクダニエル大学の学士号を取得したことがそのような後悔の念を少しでも和らげてくれるだろうと期待する。ロン夫妻が新復員兵援護法を利用して何千マイルもの距離を移動して大学進学を決断した時、2人には1つの確信があった。それは、子供たちに模範を示したかったということである。

午後8時、窓は夕日に染まっている。居間には父親と子供たちがいる。ロンはソファーに座りアイフォンでアラスカにいる妻と話している。隣にはマイルズがテレビで映画を見ている。ロンはマイルズの頭をなでる。一方、ローリーは部屋の隅にある大きなベッドに横たわりテレビを見ている。やがて、ロンは大きなあくびをする。

(2012年5月25日号)

(Copyright 2012. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.)

### 訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はリビー・サンダー氏である。

最初の復員兵援護法(GI法)は1944年に発効した。この法律は第二次世界大戦の退役軍人に対するものであり、公費で大学進学が可能となり、公費によって家を所有することもできた。その結果、アメリカ経済が大きく改善されたのである。

新復員兵援護法は2001年9月11日の同時爆破テロ以降、イラク戦争やアフガン戦争などに従軍した者を対象としている。この法律では、復員兵は在住する州で最も高額な公立大学で学ぶときは学費が全額免除される。アメリカ政府が実施した新復員兵援護法のスケールの大きさには圧倒される。これは国家による大きな教育投資と言えよう。国家が高等教育への道を保障することにより個人は自己の人生と未来を切り開いていくことができる。

ロンやジェニファーのように新復員兵援護法の恩恵を受けた者が今後アメリカ社会で活躍の場を拡げていくであろう。その背景にはアメリカの高等教育機関の柔軟性がある。